

桑名文化協

平成19年3月15日
第21号
桑名市文化協会
桑名市中央町2丁目37
TEL 24-1361
<http://bunkyo-kuwana.jp/>

佐藤勤三氏（初代会長）を偲んで

前文化協会会長 内藤 恵介

平成十八年七月、佐藤勤三初代文化協会会長が逝去されました。佐藤さんは、六年間会長として私達会員を指導して下さい、文化協会の発展と桑名市の文化芸術の振興のためご尽力されました。

設立準備委員会で初代会長を佐藤さんにお願ひしたところ、快く引き受けてくださいました。当時の中川市長さんは非常に喜ばれ、この後の桑名高校同窓会総会の席上での挨拶で佐藤さんに会長を受けていただいたことの紹介がありました。

佐藤さんは昭和十九年、早稲田大学文学部哲学科を卒業され、戦後中部日本放送に入社されました。その間、文化芸術にとり最も困難な時代にもかかわらず、深い教養と自由な精神を身につけられ、機会あるごとに文化芸術のみならず自然科学についてのお話をしていただきました。

入社後は、ジャーナリストとして、又経営者としても御活躍されました。その間昭和三十五年には、三島由紀夫「あやめ」のミュージカル制作責任者として、世界最高音楽番組に贈

られる「オングス賞」、芸術性を高く評価された「芸術祭賞」を受賞され、東海地区のみならず国際的にも御活躍されました。名古屋国際芸術祭の創始者となられ、海外よりオペラ、オーケストラ等を招聘し、ゴッホ美術展、イタリアルネッサンス展を開催するなど海外文化の紹介にも貢献されました。

中部日本放送を退社後、家業であるサンジルス醸造株式会社の取締役・相談役をされている時に、文化協会会長に就任されました。

初代会長として、市受託事業「桑名市民芸術文化祭」の開催、「国民文化祭・みえ」への参加、桑名市文化事業への協力等、その功績は大きく、桑名市より「文化功労賞」の表彰を受けられました。

その栄誉は、文化協会会員にとっても誇りであります。私達会員は、佐藤さんの遺志を受け継ぎ、桑名市の文化振興の為に、そして文化協会の発展の為に、お互い精進していきたいものです。

寿ぐ新春六華苑祭

第三回新春六華苑祭を終えて

芸能I部門 荒木敏文

天候に恵まれた二日間の開催でした。二日間の入苑者は、あわせて六〇〇人をこえ華やかな集いとなりました。正月の雰囲気残り、出演された女性の艶やかな着物姿、奏でられる音色、ご来場されました多くの皆様にはご満足頂けたものと思っております。

今回のイベントは、昨年の七月から実行委員会を立ち上げ、参加団体の募集・会場の配置・予算の執行等協議を行ってまいりました。特にこの時期は、それぞれの団体において、総会、新春のイベントと重なり、時期を変えたらどうかとの意見もあり、調整が大変でしたが、二十六団体のご協力のおかげで無事開催することができました。

一の間からは、吟詠・箏曲・日本舞踊・雅楽・民謡が、洋館では桑名弦楽合奏団・桑名マンドリン倶楽部による心地よい音楽が流れ、また、離れ屋では表千家によるお茶会・番蔵棟では草月流の華道展が催されました。

このように六華苑祭は、多くの団体参加のもと、市民の皆様が親しまれる事業として定着してまいりましたことから、当初、桑名市文化協会理事会企画として、三回開催を目途として計画された事業でありましたが、来年も、事業内容の充実を図り、第四回新春六華苑祭を開催してまいりたいと思っております。

終りに、二日間お世話いただいた六華苑職員の皆様、計画当初からご指導頂いた関係者の方々に、お礼申し上げます。



箏と尺八の演奏



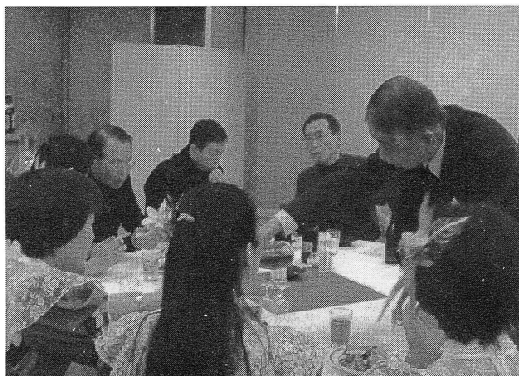
華道展

新春懇親会

芸能Ⅲ 岡本 早苗
(フラメンコ・ルナ)

新春六華苑祭の一日目に当たる一月二十日夜、シティホテルにて文化協会懇親会が開催されました。各部門が一堂に会して親睦を深める事のできるこの機会に、昨年に引き続きフラメンコ・ルナの有志八名と共に参加しました。

教育長、教育部長、四日市・菰野・東員町の各文化協会の代表の方々と、特別会員のフジタ電業株式会社と在日本大韓国民団三重県桑名支部の皆様を来賓としてお迎えし、参加者八十名を数えるにぎやかな会となりました。



フラメンコ・ルナの発表

文化功労者として表彰されました館柳説さんと金雀枝短歌社の紹介と挨拶があり、長年桑名の文化を支えていらっしやた方々の御尽力に深い感銘を受けました。

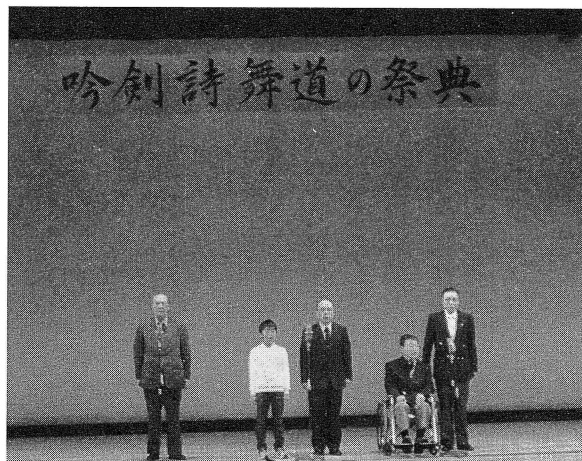
アトラクションでは、日舞、フラダンスの様と共にフラメンコ・ルナもステージ参加させて頂きました。皆緊張しましたが、事前にリハーサルした三曲を無事踊り終え、それ迄控えていたビールをおいしくいただいた次第です。

私達は踊る事によって心が健康になる事を実感しています。心の荒廃が危惧される今、文化芸術を日常とする生き方を広める事も、文化協会の担う役割だと考えます。

市民芸術文化祭を終えて

芸能Ⅱ部門
谷口 八洲江

「吟剣詩舞道の祭典」が、大山田コミュニティプラザ文化ホールに於いて、昨年十一月十二日に開催されました。いつもながら会場は、意気揚揚とした会員で一杯でした。老若男女を問わずドキドキとした緊張を抑え、舞台で無事吟じ終えた後のホッとした気持ちは何とも表現しがたいものです。



又、毎年期待され楽しみな構成吟は関心流による「詩人と人生」及び岳風流の「東海の先賢を偲ぶ」と題して各々詩舞や剣舞を交えた演出は観客を魅了しました。憂慮される事件が相つぐ昨今、先人が残された詩歌から学ぶことは多く、私達が求めている何かを示していると思います。伝統文化を誇りに日々精進したいと願っています。

演劇部門

今枝 由佳
(劇団すがお)

今年の桑名市民芸術文化祭・演劇の祭典は、昨年の「北勢線物語」に続き、劇団すがおが「灯りは消えずー定時制高校の青春」を平成十八年十二月二日・三日の二日間、桑名市大山田コミュニティプラザにおいて上演いたしました。劇団すがおは、昨年に45周年を迎えての記念の年に当たります。

劇団すがおは桑名高校演劇部（全日制・定時制）のOB・OGを中心に結成されたという歴史的な経過があり、今、桑名高校定時制が四日市北高校への統廃合問題に直面している時に当たり、定時制の問題を多くの市民の方々に理解していただこうとこの作品を取り上げました。

出演者は劇団員だけに止まらず、小学校の教員、高校の教員、劇団員OB、現役の高校生—中には四日市北高校の生徒も—その他桑名演劇塾のメンバーが賛助出演して華を添えていただきました。

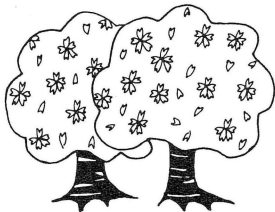
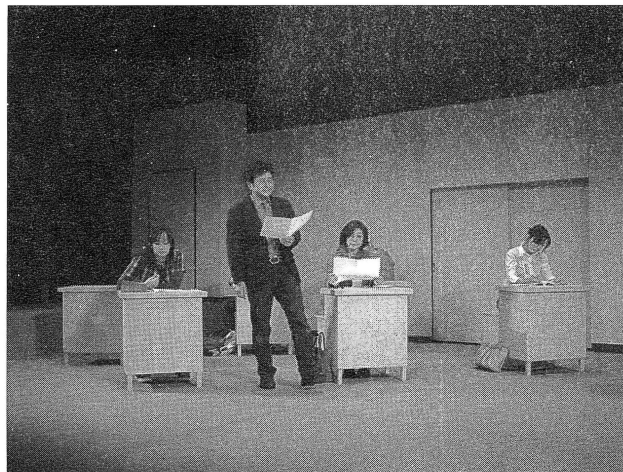
またこの上演は、同じ問題に直面している県下の定時制高校からも注目を浴び、生徒会の代表者が稽古場を見学し、出演者らがビデオインタビューも受けたほか、新聞各紙にも大きく紹介されました。中日新聞では事前と公演当日の写真入りでの記事が掲載されました。

上演に先立ち桑名高校定時制の授業を視察し、先生方との話し合いをしながら準備を進めました。

当日は定時制の演劇鑑賞として生徒をはじめ多くの同窓生たちも観劇してくれました。約五〇〇名の観客の皆さんが熱心に観劇いただき、多くの方々に共感をいただきました。

劇団すがおのモットーは「働きながら演劇を、わが住むほとりを開拓しよう」で、桑名に根ざした舞台創りを目指しています。今後とも、地域に根ざした作品に挑戦していきたいと思っています。

なお、この作品は、勢慶映像ネットワークで十二月の末に二週間にわたり放映されました。



桑名市文化功労者選ばれました

桑名市では、学術・芸術などの文化の振興・発展に寄与し、その功績が顕著である個人や団体を文化功労者として表彰しています。この度、文化協会会員の館柳説さん（美術部門・書道）と、金雀枝短歌社文学部門・短歌が受賞され、十月三十一日に市長より表彰を受けられました。

これを記念してお二人より寄稿いただきましたので、紹介します。

館 柳説

この度、大変名誉な表彰を賜り身に余る光栄に存じます。



十年前に大病をして、右手に障害が残り、書家生命が危ぶまれましたものの、左手で作品が書けるまでに回復いたしました。決してあきらめることなく、頑張ってきた良かったとつくづく思っています。

この表彰は大きな自信にもつながり感謝の念で一杯です。これからも書を通して市の文化振興の向上発展に寄与し、後進の指導に精一杯努力して行きたいと思っています。居りますので、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



金雀枝事務局長

岩花 キミ代

万葉の時代より
今日まで詠いつが

れて来ましたが、五・七・五・七・七の日本民族の韻律、そして、日本語の美しさを、この受賞にあたり改めて見つめ直しております。

桑名に短歌誌「金雀枝」が誕生しましたのは、昭和二年で、今年は八十周年を迎えます。発刊した巻数は、この三月で八七〇号となり、現在も桑名の人を中心に三重県はもとより、全国から毎月短歌が寄せられて来ます。

小都市桑名に、日本の伝統文学を守りつづけています短歌誌の存在は全国でもめずらしいと言えます。これもひとえに桑名のみなさまの陰のご支援と、文学にふさわしい風土によって育てられましたことを思い感謝の気持ちでいっぱいです。

この受賞を機にさらに桑名の文化発展のために精進したく心を新たにした次第です。今後共一層のご指導と、ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。

平成 19 年度 月釜日程表

と き 午前 10 時～午後 3 時 30 分
ところ 六 華 苑 離れ屋・番蔵棟

開 催 日	茶道担当流派	華道担当流派
平成 19 年 4 月 14 日 (土)	遠 州 流	勅使河原和風会
5 月 20 日 (日)	表 千 家 流	MOA 山月光輪花
7 月 15 日 (日)	松 尾 流	小 原 流 未生流中山文甫会
9 月 16 日 (日)	煎 茶 松 風 流	池 坊
10 月 21 日 (日)	裏 千 家	華道展はありません
平成 20 年 1 月 20 日 (日)	遠 州 流	草 月 流
2 月 17 日 (日)	裏 千 家	竹 真 流
3 月 16 日 (日)	表 千 家 流	石 田 流 生 け 花 池 坊

菖蒲茶会

と き 6 月 2 日 (土) 午前 10 時～午後 4 時
ところ 九華公園内社務所… 裏千家
六華苑和館一の間… 松尾流(二の間…寄付)
前売券 1,200 円、当日券 500 円
(入苑料込お茶二服) (入苑料別お茶一服)

香りに遊ぶ

茶華香道部門 近 藤 ゆう
志野流香道

志野香道桑名教場は、昨年の文化祭に五年目の参加をしました。

組香席と銘香席の二席もたせていただきました。

組香席は、数種類の香を、和歌や物語、季節の行事などをテーマにして組み、それぞれの香りの異同を聞きあてる一種の競技です。今回はことほぎなどのお祝いにふさわしい組香「異三徳香」を楽しんでいただきました。銘香席は、銘香を三種ずつ炷かせていただき

ました。

香道は微細な香りの差異を「聞き」わけける伝統芸道です。何百年と伝わる香木の一片を聞くことは豊かなたしなみです。香と暮らす楽しさを味わっていただけたと思います。



桑名市文化協会育成補助金の募集のお知らせ

桑名市文化協会では、桑名市の芸術文化振興のため、文化協会会員が企画して行う事業に対して補助金を交付します。つきましては申請される方を募集します。

◎補助対象団体等

文化協会の個人及び団体。ただし、平成19年度4月1日をもって、桑名市文化協会に在籍一年以上の会員。

◎補助金の額

事業企画実施に要する交付対象経費の80%以内の額で30万円を限度とする。

◎応募の方法

文化協会事務局(教育委員会文化課内)で申請書類を受け取り、同事務局へ申請する。

◎応募受付期間

平成19年3月13日(火)～4月13日(金)
(平成19年4月1日～平成20年3月31日の実施事業分)

◎申請の制限

平成17年度・18年度に補助金を受けた会員は交付申請できない。

★お問い合わせ

桑名市文化協会事務局
(桑名市教育委員会 文化課内)
☎ 0594(24)1361

文協文芸

俳句

俳句サークル

あやめ会のこの一年

あやめ会 根来 毅

公民館俳句として発足

以来、三十八年に及ぶ「あやめ会」は三重県に馴染みの深い山口誓子先生の流れを汲む、結社「煌星」の主宰をしておられる、石井いさお先生を講師として毎月第二火曜日、中央公民館にて句会を開き、その折々にあった兼題をテーマにして、選句、合評、講評をしている。講師の先生を結社の主宰にお願いしている「あやめ会」はそこに身を置く会員の少なからず、自負しているところである。

他に正月は初句会を桑名シティホテルで、又桜の時期は、花見吟行を、春日神社の「かすが」で行った。その折折の特選は、

初句会分

大空へぐいと吸はるる奴唄

早川 恵子

樟脳の香をまとひ来し春着の子

長谷川 宏

元朝の寺町香のただよへる

佐野 芳子

花見吟行分

花の雨城主の鍛滑り落つ

菊田 眞佐

神苑の生絹の雨に散る桜

奥野 裕子

目の奥の薺めく色や花疲

岡副 佐代子

又九月には関の宿場街道を地元
の歴史案内人の説明を受け乍ら吟
行、そのあと国民宿舎、関ロジ
に場所を変え句会を開いた。

「特選」は

本陣趾標石のみの秋の風

伊藤ふさ子

本堂に写経の束や鉦叩

根来 和子

天高し旧街道に高札場

杉丸 君子

「入選」は

秋涼し関の町屋の通し土間

伊藤 文郎

(最高得点賞)
秋涼し錫杖斜に地藏尊

梅原 幸吉

関富士を後方に霧の加太越え

伊藤かおり

琴の音は格子戸越しに関の秋

宮田 実

秋立つや宿の二階の虫籠窓

梶間 茂子

まちなみをモカいろに染め関の秋

小林 弓子

新涼やふところ深き町屋敷

長谷川 宏

地藏堂渡り廊下の秋の風

伊藤 露子

秋興や旅籠にほのか昼行灯

奥野 裕子

町並みに溶けこむポスト秋便り

野中 博宣

庵主なき庭にみめよき桔梗かな

森内 利之

秋灯下帳場を守る大旅籠

辻 文子

秋日や漆喰まぶしき虫籠窓

木村 晴雄

哀れ蚊や眞言唱ふ地藏堂

菊田 眞佐

軒低き関の町並葦の花

三宅 富美子

行く夏や往時偲ばゆ関の宿

早川 恵子

屋根の上龍虎見守る関の秋

伊藤 寿美子

秋眞昼関宿眠りあるごとし

佐野 芳子

格子戸の家並密めて秋涼し

田辺 勝美

古手すり遊女手を振る関旅籠

谷貝 純子

虫籠窓連らぬ町並み秋涼し

根来 毅

川柳

その後のくわな川柳会

くわな川柳会 木原 広志

現在川柳界はこの吟社も高齢
化が活動の障害になっている。
くわな川柳会もメンバーの高齢

化による病氣静養のため本来の活
動を失って久しい。

昭和四十六年創立時には県内は
勿論、名古屋、岐阜から仲間が参
加百名に近い数で市長賞を競った
思い出も遠いものとなった。

長島や多度の合併で潜在する仲
間を期待したがそれも煙のように
消えた。そんな中で梶泰栄、川瀬
秋廣の住むいなべのウネリに注目
している。

ウネリの中心は中日川柳会の両
氏だが柳界の平均年齢から言えば
両氏は青年の若さ、加えて川柳に
対する情熱は半端ではない。すで
に二人の陰には柳人予備軍がいる。

一方、東方には真田五市の強い
視線がある。高齢で敗退する仲間
に代り若い柳人が育つくわな川柳
へ姿勢をととのえていきたい。

瀬古 博

へそくりを見つけた妻に拉致をされ
晩酌を減らし納める市民税

森 繁生

生きていく我慢を青い空へ描く
ひと呼吸おいて昭和の夏語る

真田 五市

改善を居間に活かした退職後
化学終え恐れず畑のネギを抜く

水谷 真

血税を飲んで銀行立ち直り
隣国に干渉される政治力

川瀬 秋廣

ありのまま自分を見せて疲れない

DNAうしろ姿が父に似る

梶 泰栄

正直に語れば君は敵になる
非常口だけは覚えた高イビキ

山本 利夫

たまに來る孫へ年金蓋を開け
年金の暮らしわびしい年の暮れ

山本 末子

秋風を一湖に集め暮れる里
一万歩目指し二人で落葉踏む

寺本 三郎

幸せは老いて夫婦で囲む膳
商魂が忘年会で客を釣り

木原 広志

相槌を打つ日の妻がおそろしい
包丁も研げぬ夫が浮気する

短歌

オーロラを見に

文学部門 松井 久雄

(「心の花」)

オーロラを今年こそはとレヴィに
ゆく少し冒険ふたりの初老

フィンランド航空機内隣席の嬰兒
の笑み掌を揺らす吾に

くねりくねり光る鈍色氷河らし暮
れゆく小窓オーロラまだか

オーロラの透ける緑光天翔けて待
ちてくるるか頭上ま近く

夜の闇に緑妖しき女神アウロラの
輝くすがたおろがみまつる

カメラ据え零下三十度寒からず恋
するオーロラ夢か現か

フロントの色白き女性初初しへ独
身ですか雄心揺らし

アウロラを見たよ見たよと弾む我
青く澄む目に射竦められて

宵闇は午後の三時に迫りくるきよ
うも会えないレヴィの太陽

ホームレスいよいよと言ひしマル
シアに日本の太陽貸してあげたい

一楓・山城顕彰短歌 小・中学生短歌部門

金雀枝短歌社

岩花 キミ代

夏の朝帽子をかぶって出掛けよう
おばあちゃん家にスイカを持って

六年 水谷 優介

夕暮れに大きくのびたかげたちが
お話している「お家に帰ろう」

六年 黒田 みゆ

梅雨の空でてるてるぼうずに願ひ事
返事はいつも「よし／まかしとけ

六年 内山末菜美

雨あがり葉っぱに水滴ついている
聞いてみたいな葉っぱの気持ち

六年 水谷 早紀

もうすぐだ社会でならう大仙古墳
自分が住んでた近くの公園

梅の実がほんのり黄色に染まる時
いろんな人が木の側に来る

ひまわりがわたしの背より高くな
り早くおいこせ笑っているよ

おとうさんはなれていてもつうじ
あう私の心いつもうれしい

ソーダ水しゅわしゅわとあわだつ
よあわが消えたらそおと静か

夏の空夜空を見上げ星つなげ自分
の星座を作り上げる

夏休み小犬を飼った僕の家とても
にぎやか名前は「こむぎ」

やさしさは夏ゆうぐれの川の色石
を放りてその音を聴く

ツバメの子きょねんは蛇に食べら
れた今年も来たが車庫に巣かえる

木の音がバサバサを呼んでい
ていろんな音で話しかけてくる

友だちが教えてくれた平泳ぎちょっ
ぱり泳げてうれしい気分

指立ててトンボがとまると信じて
たふと思ひ出す幼い自分

中二 角谷 弘樹

戦争で一体なにが残るだろう無残
な廃墟と悲しみ以外に

聞いているの？ 分かるはずもな
いけれどさみしい時は犬との会話

トランペット心を込めて吹いてい
ます届いていますか大好きな君に

あの人が他の誰かと話してるただ
それだけで胸がチクチク

自転車のペダルをこいで風をきる
朝日がさすよ僕の背中に

雨が降る別れ道にて「また明日ね」
と笑顔で言った一つのカサに

春風が本のページをめくりだす若
葉のしおり春のお便り

空の下芽吹く新芽と笑い声どちら
もおなじ輝く命

夏の日のこころ安らぐ風鈴の音は
風たちの暑中見舞い

雨風雪負けずに通ひ慣れてきたペ
ダルもかごももうボロボロに

雨の日の気持ちはいつもブルーだ
がブルーのあじさい太陽のよう

踏まれても負けてたまるか咲き誇
れ今日も一日ふんばるたんぽぽ

中二 久保綾須葉

包みたい丸くて大きいこの地球多くの人のやさしい心で

中二 鈴木 一弘

春の風出会いと別れを連れてきてあつという間にすぎさつていく

中二 安部 美歩

金雀枝会員短歌

人の心はかれぬ今世をはかなめり紫陽花の咲く傍へに在りて

三島間謝雄

山畑の春の陽を受くアスパラの太きも細きもぼきぼきと摘む

石川富士子

生前に妻の造りし梅の酒しづかにしづかにひとり味はふ

加藤 昇

漸くに退院したる妻在りて唯それのみに朝餉安らぐ

金森 貞夫

冬日和たてしばかりの畑の畝黒々として陽を浴びてゐる

栗山 登志

過ぎたるははかなきものよ一握りの思ひ出さへもおぼろとなれり

杉林 愛子

暮れ落ちし宮居の森より見下せる桑名の街の灯り増えくる

立松 鈴子

段差なき家に住まうは初にして部屋の出這入りすかたんを食う

丹羽 孝之

御樋代木見むと夕べを娘と行きて曳かせいただく夢心地まだ

早川 幸子

健やかに傘寿を迎ふる幸思ひ冬日射し込む床に土揉む

横田ひな子

詩

現代詩やまぶき

花糸

堀川 孝子

夜空に向って吹き上げるように

咲く合歓の花は

花びらさえも持たない

おしべの花糸

六十五年前

十五歳で役場に入った人は

お茶くみに掃除 事務の手伝い

年輩の職員の使いで赤紙を

届ける仕事

深い山道をたどると

戸口に立つのは夜

おめでとうございます

お召しがありました

深々と頭を下げ合った人たち

「おお、待ったぞ」

丸刈りの紅潮した虚勢

青ざめた母の子守唄

毎夜 咲く花よりも

もっと紅かった召集令状を握って

げんこつで叩かねばならなかった

戸口の庭先に

日常から切り離される花糸の震えべったりと汗に滲んだ
夜空に響いて

今も拾い続ける

明け方の雫にあっけなくこぼれた

炎を抱いたままくすぶっていた

一夜で事切れた

まだ なまあたたかい花を

受け取った人も

届けた人も

親父の爪

安田 治三

今 爪を切つて想った

親父の亡くなった時

親父の爪はのびていたか

身体の様子を考える余裕もなく

病院の片付けと葬儀の段取りに

いつのまにか我を忘れて

心落ち着いたときには

すでに遺影と骨しかなかった

せめてその時、鬚をそり 爪を

切つて旅立たせてやれば良かった

禿頭の親父だったか

人並み以上に毛深い身体で

手の甲にも指にも黒い毛があった

鬚はどうだったか

爪はのびていたのか

今ごろになって 気にかかる

すらりと細長い指の先にある爪

あの時親父の爪はのびていたのか

第15回総会のご案内

日時 平成19年5月12日(土)

午前10時から

(受付午前9時30分から)

会場 桑名市大山田

コミュニティプラザ中会議室

☆各部門から代議員の選出をしていただきます。詳しくは、各部門長から連絡します。

六華苑アートギャラリーの申し込みについて

この事業は、六華苑の文化事業の一環として、文化協会の協力のもとに行われるものです。文化協会会員の発表の場として、蔵庫を提供していただき、六華苑の来苑者に楽しんでいただくことが目的です。今年度六月よりスタートしましたが、三月現在で四回開催することができました。十九年度も引き続き行います。

★一般使用者優先となります。

★蔵庫の空き状況については、文化協会事務局へお問い合わせください。

★六華苑の文化事業の一環となりますので、会場の使用料は免除されますが、冷暖房費は各自負担願います。

★その他詳しいお問い合わせや申し込みは事務局まで。

(二四—二六六)

桑名ええとつこ再発見

社会文化部門

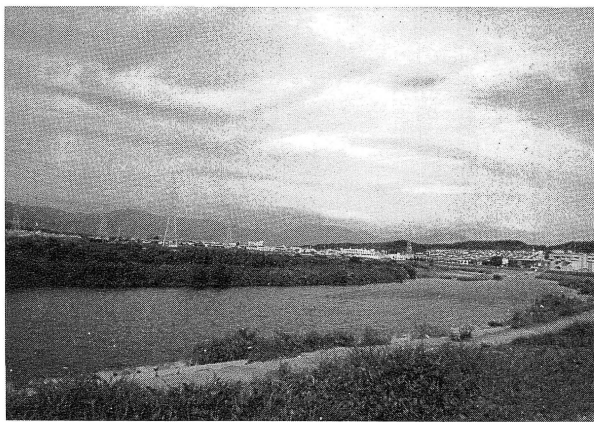
大河内 浩

(個人会員)

東海道「町屋橋」からの眺望

町屋とは町まちと同義で、桑名城下市街では員弁川下流域を、長島城下市街では長島江の一部を、それぞれ町屋川と呼んでいます。

桑名の町屋川は、その昔現在の相川町から地藏交差点に至る通称彦根線のあたりを流れていたものが、江戸時代初め城下町桑名を形成するにあたり、現在の流れに変えられました。天正十二年(一五八四)六月、小牧陣で争った羽柴



町屋川畔より西部住宅地・鈴鹿山脈を望む

秀吉と織田信雄が、その前年に連合の陣を張った矢田の川原(矢田磧)で同年十一月再び和睦したという話があり、二人の「待ち合い川」から町屋川に転じたという説もあります。鈴鹿の山々を仰ぐ悠久の流れは、寛文年間(一六七〇ごろ)の桑名十景にも「町屋長流」として挙げられました。

安永から縄生に至るこの地、現在より約100m上流の所に、東海道の一部として寛永十二年(一六三五)に初めて架橋されました。現在の国道一号線の橋は昭和六十一年に作られたものですが、その後平成十五年から歩道拡幅や高欄・照明等の整備が進められ、同十七年完成しました。桑名市側の橋詰めには藤広場と町屋橋の移り変わりの説明板が、朝日町側には「文学のなかの町屋川と橋」と題して絵図や俳句に現れた町屋川についての説明板があり、散策が楽しめます。

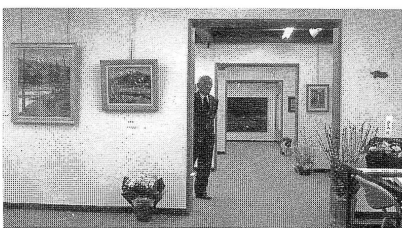
六華苑アートギャラリーを

を利用して

美術部門 山下 進

一月十一日から十四日の四日間、六華苑アートギャラリーをお借りして絵画個展を開催いたしました。会期は新年明けたばかりで大変寒い時期でございましたが二五六名と多くの方々にご鑑賞いただきました。

この会場を利用した実感でございますが、外から見た重厚な構えの中で各部屋は作品展示に適した真新しい白い壁面にピクチャーレール、部屋の明かりとスポットライトを浴びている作品たちは生き生きと輝いて見える施設でした。冷暖房も完備されており大変満足したアートギャラリーでございました。私は桑名市文化協会の会員として六華苑の文化活動の一環として協議のうえ借り受けたものであります。個展が成功に終わりましたのも、この会場が、国の重要文化財・国の名勝に指定の六華苑で開催という裏づけもあったものと感じています。年間を通した文化活動は、六華苑の新しい魅力となるものと思いました。



編集後記

本来、この号が発行される三月中旬の季節は、ようやく冬が終わり、一日一日が春らしくなってくるものです。そして、何か「ワクワク」するような気分になるのですが、今年は暖冬のせいかな、そのような「春の訪れ」を感じることもなく、季節が過ぎていく予感がします。本号紙面の約半分を文芸が占めていることにあやかり、本来の季節をかもし出すと私を感じてる和歌一首を添えて、後記に替えさせていただきます。

平 兼盛

見渡せば比良の高ねに雪消えて
若葉つむべく野はなりにけり

〔続後撰和歌集巻第一〕

(加藤)

広報担当副会長
委員 文学部門

森 一蔵

美術部門

兵後 則子

音楽部門

山下 進

芸能Ⅰ部門

安田 哲也

芸能Ⅱ部門

渡邊 法子

芸能Ⅲ部門

谷口八洲江

演劇部門

岡本 早苗

社会文化部門

今枝 由佳

茶華香道部門

大河内 浩

趣味教養部門

丹羽 宗俊
加藤 誠